



<学校教育目標>

自ら学び 自他を尊重し
心豊かでたくましい生徒の育成

<重点目標（スローガン）>

感謝+優しさ=笑顔と幸せへの道

発行：長崎市立丸尾中学校

文責：校長 川口 猛

令和8年10月14日（月）臨時号

<道しるべ> 親孝行

離れてみてわかる親のありがたみ
育ててみてわかる親の偉大さ
いなくなつてわかる親の愛情
あまり話そうとしなくても
何かしようとしなくてもいいから
会えるうちに会うこと
そばにいること
たとえ会えなくても
元気で幸せならそれでいい

～地域で発揮される力ふるさと『長崎』を大切に思う心～

10月10日（土）に、丸尾中学校青少年育成協議会主催の校区内清掃が行われました。教頭先生が事前に募集を募り、進んで参加したいというメンバーが集まりました。当日は、やや、小雨が降るのではないかと心配もありましたが、清掃活動を起こっている間は、晴れ間もさし、天候は何とかもってくれました。

清掃活動は、朝日小学校区、飽の浦小学校区の2方向から行い、水の浦公園で合流するという形で行われました。普段何気なく通っている道に落ちているごみや、落ち葉などを拾って、ごみ袋いっぱい拾伊奈が歩く姿は、**額に汗して地域に貢献する立派な態度でした。**スタート地点から水之浦公園まで、**小学生と中学生が一緒に一つのことに取り組むことは限られた機会でもあり、貴重な地域貢献**となったと考えます。

水の浦公園では、小中学生一緒になって、じゃんけん列車のレクを行って、楽しみながら、そして充実感を得た笑顔が見られ、地域と一体となって幸せを感じる時間でした。**やはり中学生は、お兄ちゃん、お姉ちゃんです。うまく小学生をリードしていく技を身に着けています。たくましさや、優しさ、爽やかさなどいろんな気持ちを感じながら**公園を後にしました。

生徒たちは、各家庭だけでなく、地域の方に見守られながら、地域の中で育ちます。**地域の諸活動の中で、生徒が自ら地域の中で貢献することは、ふるさとを大切にすることにつながる**とともに、持続可能な地域活動・持続可能な地域と子どもの関係づくりにつながると思います。現在、長崎県、長崎市では、ふるさと教育を推進しています。**ふるさと長崎を愛し、大切にふるさとを育て、長崎の活力となる人材育成**を進めています。

私は、大学4年間を東京で過ごし、リターン就職しました。ちょうど、バブルの景気の真っ只中だったので、東京の魅力にも未練がありました。友人たちは皆東京で就職したので、寂しい気持ちもたくさんありました。長崎県の教員採用試験を受けながらも、就職浪人はできない事情があったので、採用試験不合格の時のために一般企業の就職活動も同時並行で行いました。アパートからバスで駅まで行き、通勤時間帯の満員電車に乗り、企業の面接を受けて帰ってくる経験するうちに、私には、都会の生活は合わないな・・・という思いが少しずつ強くなりました。企業の内定も、長崎県の企業、東京の企業いただきましたが、結果的に、長崎に戻ろうという気持ちを優先し、東京の企業の内定をお断りして、長崎の企業を残しました。第1希望は、教員採用試験合格だったので、黙って結果を待ちました。ラッキーなことに合格したので、長崎で、自分が好きな『子ども』と一緒に生活をしていく道を選択しました。しいて言えば、都会的センスがなかったことも長崎を選んだ理由の一つです。4年間関東で生活しても、いっこうに変わらない『長崎弁』は、『根っから長崎人なんだよ！お前は！』という神様のお告げだったような気がします。

次からは、笑ってください。『この席ととと？』、『すーすする』、『お前せからしか』、『やくらしか』、『（自分のことを）おい』、『だけん・・・』等の言葉は共通語とばかり思っていたのですが、それは全く異なりました。しいには、女性から、『やだー、なまってるうー』とか、『ごめん、川口お前と電話で話していると、何を言っているかわからない』いわれる始末でした。

本題に戻ります。不思議と長崎に戻るという選択肢は、就職活動を進めるうちに強くなりました。都会で、あの通勤で、一生、生活するという覚悟よりも、自分にじっくりくる長崎の方がいいという思いが強かったと思います。もちろん、口には出さないですが、親が長崎に戻ることを期待していること、その恩に報いるには、長崎戻り、教師という職業に就くことだったという面もあります。要は、長崎に戻ることが自然なのかなという思いです。

『最後は、長崎に戻りたい』『長崎の中で自分の生きる道を探したい』という感情があったと今更思います。長崎に戻ったことで、今の生活があります。丸尾中という場所を神から与えられて、皆さんと出会うこともできました。対馬に赴任して、涙・涙のお別れを経験し、教育原点を学ばせてもらいました。外の世界を見て、長崎のあたりまえは、一歩外では当たり前ではないことを経験し、そして、自分を育ててくれた『ふるさと（故郷）』にもどれたことに感謝したいと思います。